

「言葉を越える力」を信じて 山形市立第九中学校 徐 鴻楠

「ハハハ——」

教室に、明るく響いた笑い声。

けれど私には、何が起きているのかまったく分からなかった。

ただ、その笑いの輪の中に自分がないことだけは、はっきり分かった。

私はそっと視線を落とし、教科書を見つめるふりをしながら、胸の奥にひんやりとした冷たい寂しさがこみ上げてくるのを感じていた。

それは、日本に来たばかりの冬の日のことだった。全てが新鮮だったが、同時にどこか、よそよそしく感じられた。中国から転校してきた私は、日本語が一言も分からなかった。先生の話も、友達の会話も、黒板の文字さえ。全てが見えない壁に遮られているようだった。聞こえているのに意味が分からない——それが「言葉の壁」だった。

私は次第に、話すことが怖くなっていった。伝えたいことがあっても、自分の言葉が正しいかどうかわからず、結局黙ってしまう。最初は私に興味を持って友達が集まってきた。しかし、言葉が通じず、私は、ただ笑顔を返すしかなかった。私は教室の一番後ろで、窓の外に逃げるように、視線を向ける時間が増えていった。「誰にも話しかけられませんように」そう願いながら、ただ時間が過ぎるのを待っていた。

ある日の給食、私は箸を忘れてしまった。みんなが笑いながら食事をする中、私は何をどう言えばいいか分からず黙って座っていた。すると隣の女の子が、にっこり笑って、そっと予備の箸を私の机に置いてくれた。その瞬間、胸の奥に温かな何かが触れた気がした。言葉はなかったが、優しさが伝わった。

春になって私はバスケットボール部に入った。最初は何も分からず、コートの上で立ち尽くすことが多かった。監督の説明も、仲間たちの指示も、まるで

暗号のように聞こえてきた。周囲の動きに必死でついていこうとするけれど、どこに立つべきか、どこに走るべきか分からず、ただ焦りだけが募っていった。連携がうまくいかない。パスのタイミングを外す。位置を間違えて、味方の邪魔をしてしまう。そのたびに、胸が苦しくなった。私は「ここにはいけないのかもしれない」と思い始めていた。

けれど、意外なことに、誰も笑わなかったし、見捨てる人もいなかった。むしろ仲間たちは、ジェスチャーを交えて動きを教えてくれた。「ここだよ」「こう動けばいいよ」と、言葉を越えて伝えようとしてくれた。彼らのその姿に、私はただ驚き、そして胸が熱くなった。バスケットのコートの上では、言葉よりも大切なものがあつた。パスを出す瞬間の視線、走るリズム、背中を押すような声——そこには、信頼と仲間意識があつた。私はそこで初めて、「言葉がなくても分かり合える」ということを、体の奥から実感した。それまで灰色に感じていた学校生活が、体育館の床を擦るバッシュの音と、仲間たちの笑顔の中で、少しずつ色づいていった。冷たく閉ざされていた私の心に、少しずつぬくもりが戻ってきたのだ。

私たちは、ときに「言葉」に頼りすぎてしまうことがある。けれど、言葉以上に大切なのは、「分かりあいたい」と願う心なのだ。

いま、日本では、私のような、在留外国人は350万人を超えている。その中には、言葉の壁によって、孤立している人も、少なくないだろう。だから私は伝えたい。「たとえ話す言葉が少なくても、心を寄せれば、思いはきっと届く」と。

「ハハハハハ——」

今でも、なぜ笑っているのか分からないことは、ある。

でも、今の私は、その輪の中にいる。

私は、これからも「言葉を越える力」を信じていく。

そして、誰もが孤立しない社会を、つくっていきたい。